呉音二音節去声字に対する上声点加点例について

佐々木　勇

はじめに

所謂呉音声調は、所謂漢音声調に較べ複雑であると言われる。漢音声調と比較して固定的ではなく、一資料内でも揺れが見られるからである。その揺れの代表的なものが上声と去声との間に見られるものである。この上声と去声との二様の声調が見られる字について、どの様な理由で両点が加点されることになるのかを考えることが呉音声調を整理して行く際に重要であろうと思われる。そのうちの二音節字について考えてみようとすることが本稿の目的である。[1]

一、親鸞筆『観無量寿経註・阿弥陀経註』に於ける二音節両点字

はじめに鎌倉時代極初期の呉音直読資料である『観無量寿経註・阿弥陀経註』[2]を取り上げ、二音節両点字を抜き出してみると、[3]

三―念佛三(上)[4]昧(32-6)[5]／若(入)得(入)三(去)昧(平)(16-6)

今―王今(上)爲(去)此(平)(5-4)／父王今(去)者(平濁)(4-2)

心―令心(上)堅(去)住(14-3)／心(去)眼(平濁)无(上)鄣(平)(10-3)

の如くである。「三」「今」「心」の三字について、いずれも上に上声点加点例を、下に去声点加点例を記した。二音節両点字は右の三字を含め、本資料中に57字見られる。右の三字の声調を、院政期の呉音声調を反映していると見られる『保延本法華経単字』で確認すると、

○三之(去)息(平)甘(去)く（9 3 4）[6]

○今記(平)音(去)（22 3 4）

○心作(平)息(入)林(去)反（5 1 1）

と記され、いずれも去声の字であることが知られる。その外の54字の二音節両点字についても、前時代の呉音声調資料[7]では去声の字として掲出されている。このことより、本資料に於ける二音節両点字は、本来去声字であったものが、ある場合には上声として出現した為に生じたものであると考えられる。ここでどの様な場合に上声となるのかが次に問題となる。この点について考える為に以下に本資料に於ける両点字の用例を挙げる。[8]

＜上声点加点例＞

I 句頭（1字1例）

(1)水―水(上)鳥(上)樹林(42-1)

II 句中(56字340例)

a 去声字・上声字の直後(54字262例)

(1)水―求(去濁)水(上)瀬(平)口(平)(3-3) 是爲(上)水(上)想(16-3) 有八池(去)水(上)(20-4)＜外3例＞

(2)三―修(去)諸(上)三(上)昧(49-1) 現前(去濁)三(上濁)昧(61-7) 无(去)三(上)悪趣(平)(⑤-6)＜外6例＞

(3)心―慈(去濁)心(上)不殺(入)(11-2) 三者(平濁)發(入)菩(上濁)提(上濁)心(上)(11-4) 應當(上)専(去)心(上濁)(13-7)＜外10例＞

(4)身―分(去)身(上濁)无量壽佛(40-4) 光來(上)照(去)身(上)(41-7) 雜(入濁)色(入)寶華(上)嚴(去濁)身(上濁)佛(⑬-2) 自見其身(上)(46-2)

(5)中―在虚(去)空(上)中(上濁)(7-5) 此衆(上)音(上)中(上濁)(22-2) 於現(平濁)身(去濁)中(上濁)(30-5)＜外23例＞

(6)名―首(平)題(去濁)名(上)字(平濁)(55-4) 諸經(上)名(上)故(55-4) 尚(去)無(上)三(去)悪道之(去)名(上)(⑤-7)＜外3例＞

(7)幢―其(去濁)幢(上濁)八(入)方(去)八楞(去)具(平濁)足(入)(15-2) 百億(入)華(去)幢(上濁)(16-1)七寶金幢(上濁)(15-2)

(8)從―隨從(上濁)佛後(46-3)

(9)生―无(去)生(上)法(入濁)忍(13-1) 涌(去)生(上)諸(去)菓(19-6) 必定當(去)生(上濁)(27-2)＜外10＞

(10)經―佛(入濁)說(入)阿(去)彌(上)陀(上濁)經(上)(①-1)生經(上)

七日(54-5) 諸經(上)名(上)故(55-4) 甚深經(上濁)典(58-7)

今＜2(以下複数の場合に用例数のみ記す)＞嚴＜3＞金＜16＞音＜4＞云＜2＞人＜7＞先＜2＞前＜5＞因　圓＜2＞天＜11＞歡　眞　聞＜9＞蓮＜6＞輪＜2＞間＜9＞頻　令＜5＞同　常＜2＞形＜2＞應　方＜6＞明＜6＞擽＜2＞瓔　僧＜4＞光＜26＞稱　空＜5＞童　精　網＜6＞聲＜6＞莊　照　來＜4＞哀　底　提＜6＞蓋　西　開＜2＞

b 平声字・入声字の直後(20字78例)

(1)水―次當(去)想(平)水(上)(20-4) 一一水(上)中(上)(20-7) 八功德(入濁)水(上)(21-6)＜外4例＞

(2)三―得念佛三(上)昧(30-6) 名念佛三(上)昧(32-6) 名第三(上)觀(平濁)(16-7) 名第十三(上)觀(平濁)(44-2)

(3)心―發三(去)種(平濁)心(上)(44-4) 三(去)者(平濁)廻向發願心(上濁)(44-5) 但發(入)无(去)上道心(上)(49-4) 發无上道心(上)(56-7・61-7)

(4)身―无量壽佛身(上)(31-1) 照行者(平濁)身(上)(45-7) 是法(入)界身(上)(27-5) 照行者身(去上)(48-4)

(5)中―一一寶中(上)(15-6) 瑠璃色中(上)(18-1) 色中(上)上者(19-2) 如於(上)鏡(平)中(上濁)(27-1)＜外6例＞

(6)名―汝稱(去)佛名(上)故(56-1) 得聞佛名(上)法名(57-1) 聞三(上)寶(平濁)名(上)(57-2) 但聞佛名(上)(62-6) 即是持(去濁上濁)无(上)量壽佛名(上)(63-4)

(7)幢―无量幢(上濁)佛(⑪-2)

(8)從―佛從(上濁)耆(去濁)闍崛山(上)没(入)(7-2)

(9)生―從心(上)想(平濁)生(上)(28-1) 上品(平濁)上生(上)者(44-3) 上品下生(上)者(49-3)中品中生(上濁)者(52-4)＜外3例＞

(10)經―臣(平)聞(去)毗(去濁)陀(上濁)論(平)經(上)說(5-2) 方等經(上)典(平濁)(45-1) 所護念經(上濁)(⑩-3)

音＜3(以下複数の場合に用例数のみ記す)＞人＜2＞前＜4＞千＜2＞天　光＜4＞方　空　聲＜2＞成＜10＞

＜去声点加点例＞

I 句頭(34字78例)

(1)水―水(去)流(上)光(去)明(上)(29-7)

(2)三―三(去)十二相(27-6) 三(去)藐(入)三(去)佛(入濁)陀(上濁)(28-2) 三(去)者(平濁)修行六念(45-1) 三(去)明六通(52-3)＜外2例＞

(3)心―心(去)之(上濁)所念(平)(7-1) 心(去)眼(平濁)无(上)鄣(平)(10-3) 心(去)歡(上)喜(平濁)故(12-7) 心(去)力所及(43-1)＜外5例＞

(4)身―身(去)塗(上濁)麨蜜(4-3) 身(去)紫(上)金(上)色(入濁)頂(平)有肉(入)髻(平)(34-5)

(6)名―名(去)闍(上)佛(⑫-4)

(7)幢―幢(去濁)上有寶(平)縵(去)(25-5)

(8)從―從(去濁)空(上濁)而(去)來(上)(4-4) 從(去濁)佛口(平)出(入)(10-2) 從(去濁)光(上)明出(16-2)從(去濁)如(上)意(平)珠(上)王(上)生(去)(20-5) 從(去濁)是西方(②-5)

(9)生―生(去)此(平)惡子(7-7) 生(去)諸佛前(去濁)(33-2) 生(去)西(上)方(上)者(42-6) 生(去)彼國時(45-3) 生(去)諸(上)佛前(去濁)(62-4)＜外2例＞

(10)經―經(去)一(入)小劫(49-2・54-6)

今＜2＞嚴　金＜3＞煩　云　先＜3＞前　因　圓　歡　聞＜3＞蓮　頻　千　令＜3＞同　常＜3＞稱＜3＞空　網　聲　照＜4＞成＜3＞来＜2＞西

II 句中(50字236例)

a 上声字・去声字の直後(27字55例)

(2)三―當(去)修(上)三(去)福(入)(11-2) 令離(上)三(去)塗(上濁)(39-1) 尚(去)無(上)三(去)悪道之(去)名(上)(⑤-6)

(3)心―入一切衆生心(去)想(平濁)中(上)(27-5)

(4)身―其餘(上)身(去)相(平濁)(37-1) 餘諸(上)身(去)相(平濁)(39-6)

(5)中―於其(上濁)中(去)間(上濁)(40-4) 是名中(去)品下生者(54-6) 是名中(去)輩生(去)想(54-7)

(6)名―世尊當(去)何(上濁)名(去)此經(62-1) 此經名(去)觀(平)極樂國土(62-3) 執(入)持(上濁)名(去)号(⑧-6)

(7)幢―化成(去濁)幢(去濁)幡(上濁)(19-7)

(9)生―從(去濁)如(上)意(平)珠(上)王(上)生(去)(20-5)衆生(上濁)生(去)者(平濁)(⑦-6)

今　嚴　金＜2＞因　音＜2＞人　天＜4＞聞　蓮＜3＞間　方　明＜6＞瓔＜3＞光＜3＞精　莊　照　終　底　西＜5＞

b 平声字・入声字の直後(43字181例)

(2)三―若(入)得(入)三(去)昧(平)(16-6) 發三(去)種(平濁)心(上)

(44-4) 若三(去)日(⑧-6)三(去)藐(入)三(去)菩(上濁)提(上濁)(⑭-5)〈外6例〉

(3) 心—亦(入)見佛心(去)(32-7) 一心(去)不(上)亂(平)(⑧-7)當(去)起自心(去)(41-5)

(4) 身—捨(平)身(去)他(上)世(17-3) 於現(平濁)身(去濁)中(上濁)(30-5) 舉(平)身(去)光(去)明(上)(38-5) 或現小(平)身(去)(43-5)〈外13例〉

(5) 中—上品中(去)生(上濁)(47-1)

(6) 名—亦名(去)淨除業(入濁)鄣(平)(62-4) 何(去濁)故名(去)爲(上)(⑭-1)

(7) 幢—一幢(去濁)(26-7) 法幢(去濁)佛(⑫-5)

(8) 從—即(入)從(去濁)座起(62-1)

(9) 生—我當(去)往(平)生(去濁)(8-2) 我今樂(平濁)生(去)(9-7)必(入)生(去)淨國(17-3) 即生(去)西方(54-4) 日(入)生(去)佛(⑪-7) 〈外15例〉

(10) 經—飯(去濁)食(入濁)經(去)行(上濁) 及經(去)名(上)者(⑭-3)
今〈6〉金〈11〉音〈4〉云〈3〉入〈10〉前〈8〉因〈4〉天〈4〉眞〈3〉聞〈7〉蓮〈2〉輸〈3〉間〈4〉千〈5〉令〈6〉方〈6〉明〈2〉蝶〈3〉光〈11〉稱〈2〉空〈2〉童
精　網　照〈3〉楞　終　成〈9〉來〈3〉哀　提〈2〉蓋〈2〉開

以上である。右の例より句頭で上声となるものは一字(水)のみであり、上声となるのは句中に於いてであることが先ず知られる。換言すれば、当該字が句頭に位置する場合には去声となり、句中に位置する場合には上声となる場合が有るということになる。このことは本資料に於ける上声点が、去声であるべきものの誤点であるなどと考えることには無理が有ることを示していると解される。句中の上声点例には上声として発音される理由が有ったと考えられる。

句中に於ける上声の例にさらに注目すると、340例中八割弱の262例が去声または上声の直後での上声の例(a)であることに気づかれる。本来の二音節去声字が、去声または上声の直後では上声となることは既に指摘されており、[10] 当時の日本語のアクセントに於いて不自然であった中低型の忌避という観点から説明されている。[11]

しかし、本資料に於いては平声または入声の直後での上声の例が少数とは言いながら二割強見られるのであり、この全例を例外としてしまうことは難しいであろうと思われる。

奥村三雄氏は二音節上声の出現について、「『語中尾に存する上昇調(3声)が高平調(2声)に変り易い』という声調法則」によって説明された。[12] ただし語中尾であれば総て上声になる訳ではなく「いろいろ複雑な規則が認められる」とされ、そのような「〈話線的関係による声調変化〉の或るものが、しばしば、〈字音の声調のラング的区別〉として」とらえられ、辞書の二音節字にも上声点が加点されることとなると解釈されている。[13] ここで言う「話線的関係による声調変化」とは一つには去声または上声の直後で去声字が上声となることであり、今一つは平声または入声の直後で去声字が上声となることであると解される。ただし後者の場合は、直前の平声または入声という調値が直接去声字を上声に変化させる力として働いたとは考え難い。本資料に於いて平声または入声の直後で両点字が現われる例は259例(78例+181例)見られるが、そのうちの七割程の181例には去声点が加点されているからである。やはり句中では「話線的」に上声となる場合が有ったと考えるべきであろう。

二、平声または入声の直後で上声となる場合の有る字

さて、ここで問題となる平声または入声の直後で上声となる場合の有る字とはどの様なものかを見る。前掲の20字を改めて見ると、例外的に句頭での上声点が見られた「水」の一字を除き韻尾が〔i〕の字は見られないことに気づかれる。鎌倉時代初期の二音節去声字の韻尾になり得る音としては、〔m〕〔n〕〔u〕〔i〕(〔ŋ〕は〔u〕となったものと思われる)が考えられる。そのうちの〔i〕の例のみが極めて少ないのである。このことは同じく句中の平声または入声の直後でありながら去声となった例、43字181例中には韻尾〔i〕の字が5字(開・来・哀・提・蓋)9例見られるのと比較することによっても知られる。二音節去声字全体の中に占める韻尾〔i〕の字の割合が元来少ない為その差は判然としないが、句中の平声または入声の直後で上声となるものには、例外である「水」を除き韻尾〔i〕の字が一例も見られない点は注目される。

また去声点のみが加点された二音節字を見ると、本資料中にそれは94字存するのであるが、その中で韻尾〔i〕の字は次の14字である。

吹・映・階・乃・制・唯・最・皆・随・雖・哉・悴・題・茎

右のうち始めの四字「吹・映・階・乃」には上声または去声の直後でもなお去声となる例が有る。次のような例である。

微(去)風(上)吹(去)動(平濁)(⑥-1) 以爲(上)映(去)飾(入濁)(18-3) 以爲映(去)飾(入濁)(25-6) 四邊(去)階(去)道(③-4) 蓮華乃(去)開(50-3)

これに対して上声点のみが加点された二音節字は本資料中に38字存するが、韻尾〔i〕の字は「惟・胎・海」の三字だけである。しかも、「惟・胎」の二字は次の様な去声の直後での上声加点例だけが一例ずつ存する字である。

教(平)我思(去)惟(上)(10-1) 不處(平)胞(去)胎(上)(41-3)

よって、このことからも上声となる字の中には韻尾〔i〕の字が少ないということが言えよう。

三、韻尾〔i〕の字が上声となりにくいことについて

句中で上声となるとは、言うまでもなく、句中では上昇調ではなく高平調になるということである。上昇調を実現する為には高平調よりもより多くの注意とより長い発音時間が必要であったと考えられる。[14] 時代は降るが室町時代の国語アクセントを反映するとされる『補忘記』には次の様な記述が見られ、去声調は長く上声調は短いと意識されていたことが知られる。[15] (引用は貞享版により、節博士は略す。尚、印刷の都合上、小書の部分は《 》につつんで本行に組み入れて記す。)

◦融◦◦通《華嚴等又尓也三井云ニハ融◦◦通 融ノ字不ㇾ引》
◦功力。　◦功德◦◦　◦功◦能《南都云ニハ◦功◦能ニ》
◦衆◦多《多ノ字或濁兩方用南都云ニハ衆◦◦多ニ》

右のうち特に「融」の字の注記の中での上声点加点例に対して「融ノ字不ㇾ引」と記されていることに注目される。

これらのことから、句中に於いて二音節去声字が上声に発音されることが有るということも、句中に於いては長い発音時間を必要とする去声（上昇）調が音声として実現されないことが有った為と考えられる。

前節で見た様に、句中の平声または入声の直後で上声となる二音節字は〔m〕〔n〕〔u〕韻尾のものが大部分であり、〔i〕韻尾のものは例外的であった。すなわち〔i〕韻尾の字（具体的には〔ai〕・〔ui〕・〔ei〕の連母音を有する字）は短く発音されることはなく確実に二音節として発音されていたと考えられる。

四、〔m〕〔n〕〔u〕韻尾の無表記例について

〔m〕〔n〕〔u〕韻尾の字が一音節の如くに発音されていたのではないかと考えさせられる事象が、同じく親鸞聖人遺文の中に見られる。『観無量寿経註・阿弥陀経註』には仮名音注がほとんど見られないが、親鸞聖人遺文中には多くの漢字に仮名音注が付された資料がある。その中で分量も多く仮名音注も豊富な『西方指南抄』を取り上げ、仮名音注について調べると、字音の韻尾を表記していない例を指摘することができる。次の様な例である。

（当該字）	（韻尾無表記の例）	（韻尾を表記した類例）
念	臨終正念《リムシユシヤウネ》ノタメニテ（下本63）	臨終正念《リムシユシヤウネム》ノタメニ（上本27） 臨終正念《リムシユシヤウネム》（上本22・25・25・26・下本63・65・117） 正念《シヤウネム》（上本24・25・26・上末119・下本65・77・78・118） 正念稱名《シヤウネムシヤウミヤウ》（上末20）など
然	自然《シネ》ニ（中本4）	自然《シネン》ニ（上本31・上末103・中末60・127・下本39・169・179・下末91） 自然《シネン》（上末13） 七寶自然《シチホウシネン》（上本125）など。
善	善根《セコン》（下本159）	善根《センコン》（上本29・75・84・86・88・上末35・中本38・47・中末79・93・下本43・46・99・127・160・160・下末84・123） 多善根《タセンコン》（上末39・39・40） 少善根《セウセンコン》（上末38・39・39）など。
生	往生《ワウシヤ》スル（上本60）	往生《ワウシヤウ》スル（上本31・54・71） 往生《ワウシヤウスル》（中本39） 往生《ワウシヤウ》スヘキ（中本89・中末57・117） 往生《ワウシヤウ》ス（中本34・下本14・14・32・69） 往生《ワウシヤウ》シテ（上本21・下本34）〈外、「往生《ワウシヤウ》」の例116例〉など。
上	无上道心《ムシヤタウシム》（上本104）	无上道《ムシヤウタウ》（上本12） 无上道心《ムシヤウタウシム》（上末4）など。
量	无量光《ムリヤクワウ》（上本77） 觀无量壽經《クワンムリヤシユキヤウ》（下本71）	无量光《ムリヤウクワウ》（上本78・80） 无量光經《ムリヤウクワウキヤウ》（上本115）など。 觀无量壽經《クワンムリヤウシユキヤウ》（上本38・54・上末100・中本34・下本16・39・41・99・下末3） 觀無量壽經《クワンムリヤウシユ》（下末103）など。
光	華光如來《クエクワニヨライ》（上本105） 光明无量《クワミヤウムリヤウ》（上本115）	世尊藥師瑠璃光如來《セソンヤクシルリクワウニヨライ》（上本30）など。 光明《クワウミヤウ》（上本6・7・11・19・68・78・78・78・78・78・79・79・80・81外25例） 光明山《クワウシヤウセン》（中末37） 光明偏照《クワウミヤウヘンセウ》（中本64・74） 光明最尊《クワウミヤウサイソン》（上本97）など。
中	下品中生《ケホムチシヤウ》（上本13）	上品中生《シヤウホムチウシヤウ》（上本12）など。
決	決定《クエチヤウ》スヘキ（下末40） 決定心《クエチヤウシム》（中末57）	決定《クエチチヤウ》スヘキ（上末75・中末123） 決定《クエチチヤウ》シテ（上本21・55・71・上末13・13・35・中末94・下本44・46・179・下末118）など。 決定心《クエチチヤウシム》（中末55・58・64・64・76・下本46・53）など。
薩	菩薩《ホサ》（上本17）	菩薩《ホサチ》（上本16・17・17・18・33・34・108・中本11・24・40・40・40・41・下末16・21・53・173）〈外、「——菩薩《ホサチ》」の例51例〉

『西方指南抄』の仮名音注の中、韻尾を表記しない例は右の10字13例のみである。本資料の仮名音注には原則として音注の一部だけを記す例は見られない。そしてその例外の例が右の10字13例なのである。韻尾に注目すると10字13例のうち、8字10例は〔m〕〔n〕〔u〕であり2字3例は〔t〕である。また、韻尾が表記されていない漢字も、下段に記した同様の例では韻尾まで確かに表記しているのである。韻尾無表記の例は極めて少数であり、多くの仮名音注の中で特にその例に限って意図的に韻尾を無表記にしたとは考え難い。その無意識のうちに無表記された字が韻尾に〔m〕〔n〕〔u〕を有するかまたは〔t〕を有する字に限られるのである。[16]

舌内入声音の多くは比較的後まで原音〔t〕を保っていたとされており、親鸞の資料についてもその指摘がなされていることは周知のところである。[17] その〔t〕は直前の音節と結びついて一音節として意識され、また発音もされていたと考えられる。この舌内入声音を無表記にした例が出現するのはその為であろうと思われる。

舌内入声と同じく無意識のうちに無表記にされた韻尾〔m〕〔n〕〔u〕の字も、同様に考えられるのではないだろうか。これらの字も、韻尾が直前の音節と一まとまりにとらえられ、一音節の如くに発音されることが有り、韻尾の無表記はそのことを示していると思われるのである。[18] また韻尾無表記の例は次の如く、他の親鸞遺文中に見られるが、韻尾は〔m〕〔n〕の字に限られる。

自然ナルコトヲ（『一念多念文意』50-5）

但使廻心多念佛（『専修寺本正月二十七日本　唯信抄文意』49-4）

右は、それぞれの資料中での唯一の韻尾無表記の例である。これらを含め、韻尾無表記の例は語中に多いことにも気づかれる。

五、他資料に於ける二音節字に対する上声加点例について

ここで直前の字の声調の影響によるとは考えられない上声加点例は〔i〕韻尾以外の例が大部分であることを『観無量寿経註・阿弥陀経註』以外の資料で確認しておきたい。

まず同じく親鸞の資料から見ることにする。（当該字と、去声または上声の直後以外の上声点加点例の例数を複数の場合に限り括弧に入れて記すにとどめる。）

①『草稿本教行信証』

＜韻尾〔m〕〔n〕〔u〕＞

三(3)心　人(2)免　千　尊(5)山　年　檀　禪　輪(2)還

縁(2)眞　言(14)門(9)大　中(3)僧　光(3)名(2)情(3)經

(8)聲(2)乘(2)成(6)

＜韻尾〔i〕＞

水(2)海(2)

②『浄土論註』

＜韻尾〔m〕〔n〕〔u〕＞

縁(2)名　性

＜韻尾〔i〕＞

（該当例なし）

③『三帖和讃』『尊号真像銘文　略本』『尊号真像銘文　広本』『専修寺本唯信抄』『西本願寺本唯信抄』『唯信抄　断簡』[19]

＜韻尾〔m〕〔n〕〔u〕＞

三　心(3)音(3)斟　人(5)勲(2)天　尊(4)年　旬　門(16)

盤　中　光(22)堂(3)增　成　明(2)王(2)生(2)經(4)聲

(3)

＜韻尾〔i〕＞

水(2)海(15)

以上の親鸞の資料内でも、去声または上声の直後以外で上声となる二音節字には〔i〕韻尾のものがほとんど見られないことは『観無量寿経註・阿弥陀経註』の場合と同様である。例外となる字も「水」と「海」であり等しい。「水」は「観智院本類聚名義抄」に「禾ス：イ」（法上一）と見え、『法華経単字』の掲出字声点も去声点であることから院政期には去声であったと思われるが、親鸞遺文では『観無量寿経註・阿弥陀経註』の句頭の例に一例去声の例が存するのみであり、他は総て上声で出現する。鎌倉時代中期の他資料でも上声で出現することが多く、当時は上声の方が一般的であったものかも知れない。

この点で〔m〕〔n〕〔u〕韻尾の諸字とは基本的に異なる。「海」については呉音資料の中で去声点加点例が見出されず、正に例外と言える。[20] 親鸞と同年に生まれた明恵撰の『光明真言土沙勧信記』でも次の如くである。

④『光明真言土沙勧信記』

＜韻尾〔m〕〔n〕〔u〕＞

談　圓　青　同

＜韻尾〔i〕＞

（該当字なし）

次に字音直読資料のうち、わずかな資料についてではあるが時代順に見る。

⑤『四種相違疏文』（仁安三年＜一一六八年＞点）[21]

＜韻尾〔m〕〔n〕〔u〕＞

三(12)言(14)因(2)縁(8)便　云　詮(6)名　同(3)中(7)

相(51)

＜韻尾〔i〕＞

雖

⑥『大般若波羅蜜多経　巻第一』（東京大学国語研究室蔵、建長六年＜一二五四年＞頃点）

＜韻尾〔m〕〔n〕〔u〕＞

人　言(24)天(30)千(8)韻　前(3)光(4)兩(20)中(16)等(3)

香　聲

＜韻尾〔i〕＞

水　海

⑦『妙法蓮華経　巻第二』（国立国会図書館蔵、鎌倉中期点）

＜韻尾〔m〕〔n〕〔u〕＞

三(5)心　人(4)年(2)前　尊　言(26)門(3)中(7)城　並

經(12)聲(2)盗

＜韻尾〔i〕＞

災

⑧『成唯識論　巻第三』（国立国会図書館蔵、鎌倉後期点）

＜韻尾〔m〕〔n〕〔u〕＞

三(13)心(4)滅　全(2)旦　言(8)詮(6)中(19)同　名(9)成

(6)生(7)相　空(2)經(11)聲(2)能　行(3)表(4)

＜韻尾〔i〕＞

來(3)

以上⑤～⑧の字音直読資料に於いても、直前の字の声調の影響によるとは考えられない上声加点例の中では〔i〕韻尾の字は例外的であることが知られる。

む す び

呉音二音節字の中で上声点が加点された例は鎌倉時代初期に於いては句中・語中の例が大部分であった。そのうちの多くは直前の字の声調の影響によって去声から上声へ声調変化した例であるが、直前の字の声調の影響によるとは考えられない上声点加点例も二割程度存した。それらの例を見ると少数の例外は存するがほとんどが韻尾に〔m〕〔n〕〔u〕を有する諸字であることが知られた。また〔m〕〔n〕〔u〕韻尾を無表記にする場合のある資料が存することから、韻尾に〔m〕〔n〕〔u〕を持

つ字は句中・語中では一音節の如くにとらえられ、その為に上声点が加点されたのではないかと考えた。呉音一音節の去声字が当時の和語と同様、句中・語中に於いては上声となりやすいことは別稿で述べた。

それでは一音節ととらえられることのあった〔m〕〔n〕〔u〕韻尾字と、そうではない〔i〕韻尾字との差は何か、特に同じく母音連続の見られる〔u〕韻尾字と〔i〕韻尾字との差は何かが問題となる。韻尾〔u〕としてこれまで一括して扱って来たものは具体的には〔au〕〔ou〕〔eu〕〔uu〕〔iu〕の韻尾を持つ諸字である。これらのうち〔iu〕はやや遅れたようであるが、[22]〔au〕〔ou〕〔eu〕〔uu〕は当時長母音化していたものと思われる。これに対して〔ai〕〔ui〕〔ei〕は一部の方言を除いて現在も長母音化は起こっていない。ここに〔u〕韻尾字と〔i〕韻尾との差が存すると思われる。[23]

以上、二音節字に対する上声点加点例について解釈を加えた。しかし、少数とは言いながら〔i〕韻尾の字に直前の字の声調による以外に上声の例が存するのはなぜか、直前の字の声調による声調変化の結果の上声も一音節としてとらえられていたものかどうか等、解決せねばならない問題が残っている。

注

(1) 一音節字で去声と上声に分かれるものについては別稿(『鎌倉時代語研究』第十輯所収)で述べた。

(2) 調査は『親鸞聖人真蹟集成　第七巻』(法蔵館)による。奥書は見られないが同書解説の中で宮崎圓遵氏は建仁～元久頃の成立と推定されている。全巻に詳密に差声されている。

(3) 以下、上声の用例も見られ、去声の用例も見られる字を高松政雄氏の用語をお借りしてこの様に呼ぶ。

(4) 上声点を以下(上)と記す。他の声調についても同様。尚、本資料では入声に「急」(舌内入声と促音を示す)と「緩」(開音節化した音を示す)との二種類を区別しているが、ここでは共に(入)あるいは(入濁)として分けない。

(5) 注(3)書中の所在を示す。上の数字が頁数、下の数字が行数である。頁数を○で囲んだものは『阿弥陀経註』の用例である。

(6) 古辭書叢刊刊行會の複製本(雄松堂書店、昭和四十八年一月)の頁数・行本・段数である。

(7) 『承暦本金光明最勝王経音義』「図書寮本、観智院本類聚名義抄の呉音注・和音注」『九条本法華経音』『法華経単字』『安田八幡宮本大般若波羅蜜多経』である。

(8) まず両点字を取り上げ、どの様な場合に上声となりどの様な場合に去声となるのかを見ることが有効であろうと思われるからである。

(9) 上声点加点例の当該字に通し番号を付した。去声点加点例の同一字は同一番号である。

(10) 奥村三雄「呉音声調の一性格」(「訓点語と訓点資料」第十八輯、昭和三十六年十月)。

(11) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』四二二頁。

(12) 注(10)文献。

(13) 同右。

(14) 金田一春彦「国語アクセント史の研究が何に役立つか」(『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』昭和二十八年五月)。

(15) 一音節去声字が鎌倉時代中期にほとんど上声に移行した背景には、長音が音節として独立し、去声調は一音節でありえなかったという理由が考えられる。

(16) 外に〔i〕〔Φu〕〔ki〕〔ku〕韻尾が無表記される可能性は有ったはずである。

(17) 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(「東洋大学大学院紀要」昭和四十年九月)。

(18) その外、『草稿本教行信証』に「申ニ己 心ニ」(二50)の例に「心」に「シ」とだけ加点されたものが見られるが、比較的分量の多い同資料内で類例が見出せない為、保留としておきたい。

(19) 紙幅の都合で漢字片仮名交り文であるこれらの資料の例をまとめて挙げることとする。

(20) 本来上声であった可能性も考えながら尚検討したい。

(21) 注(11)著書。四〇八～四一一頁の調査報告に依る。

(22) 沼本克明『日本漢字音の歴史』(東京堂出版)二五五頁。

(23) 撥音・長音は前の音と共に一シラビームとしてとらえられることが有ったが、〔ai〕〔ui〕〔ei〕の母音連続は前の音を含めて常に二モーラと解されていたということになろう。

＜付記＞

本稿を成すにあたり小林芳規先生に御助言を賜った。記して感謝申し上げる。

――広島大学大学院博士過程後期在学――

彙　報

◎昭和61年度広島大学国語国文学会秋季研究集会

と　き　昭和六十一年十一月二十九日(土)・三十日(日)

ところ　二十九日―法・経済学部一三四講義室

三十日―文学部大講義室

発表題目並びに発表者

＜二十九日―午後二時開始＞

○「ふるさとびと」小論　――「菜穂子」Cycleの収束点として――　山本　裕一

○「弟子」試論　――その構造及び人物像に着目して――　藤村　猛

○「風の又三郎」再論　青木　美保

○『浜松中納言物語』登場人物小考　山崎　桂子

○正治百首の「鳥」の歌について　田中　政幸

＜三十日―午前十時開始＞

○京都女子大学蔵表白集について　――鎌倉初期に於ける表白集の編纂活動――　山本　真吾

○方言語彙の比較研究の方法について　室山　敏昭

《総　会―午後零時五十分より》

《特別研究発表―午後二時より》

○関東地方域の方言についての方言地理学的研究　大橋　勝男

○漱石文学の研究――表現を軸として――　相原　和邦